(1) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

『夏の夜の夢』のシェイクスピア

— 仮説設定の試み —

富原芳彰

『夏の夜の夢』(A Midsummer Night's Dream)は、作品全体の形態的構造という観点から見ると、シェイクスピアの劇のうちでもとくに工夫した複雑さがあり、その全体の意匠には特別に凝った趣向が見られる。

多くの批評家が指摘するように、この作品の中には種類の異なった世界が共存し、しかもそれらが巧みに混融させられて、作品全体としては、一つの渾然たる複合的世界を作り出している。そこには、まず、シーシェウス(Theseus)とヒポリタ(Hippolyta)の古典的英雄の世界がある。この二人の結婚ということが、この劇を始動

させかつ終結させるもので、そのことが、いわば、この劇の外枠を形作っている。この外枠の中に、四人の男女の恋愛喜劇の世界と、機織りのボトム(Bottom)をはじめとする職人たちの土俗的世界と、オベロン(Oberon)、タイテイニア(Titania)を国王および王妃とする妖精たちの超自然的な世界が含まれている。この妖精たちの世界は、単に外枠の内部に含まれている一つの世界であるにとどまらず、その世界の王オベロンは、他の二つの世界、四人の男女の恋愛喜劇の世界と職人たちの土俗的世界へも支配力を及ぼしている。そればかりではなく、

この劇の外枠をなすシーシユースとヒポリタの結婚ということも、最後には、この妖精たちによって祝福されるということになっている。それから、職人たちの世界は、その中に、それ自身もう一つの世界を持っている。かれらがシーシユースとヒポリタの婚礼を祝って上演する素人劇の内容をなすところの、ピラマス (Pyramus) とシスビ (Thisbe) の物語があらわす古典的ロマンスの世界である。劇の中にまた劇があるという趣向そのものとはとくに珍らしくはない。シェイクスピアも、『夏の夜の夢』の直前の作品『ジャジャ馬馴らし』(The Taming of the Shrew) において、劇の本体を形式上は劇中劇にするという形で、一種の意味では大規模に試みた趣向である。『夏の夜の夢』の形態的構造の複雑性を考える上で、われわれが見落してはならないものも一つある。それは、この劇の外枠の外側にあるものである。それをもこの劇はみずからの中に取り込んで、そのようにしてみずからの全体的世界を作り上げているからである。

『夏の夜の夢』は、その最初の版本である一六〇〇年出版の四折本の扉に「宮内卿閣下の劇団によってたびたび公演されたとおりに〔印刷出版〕」とうたわれてい

るように、シェイクスピアが専属した劇団によってたびたび公衆劇場で一般の観客の前でも上演されたものである。しかし、それが、元来は、誰か貴人の婚礼の祝いの場で余興として上演されるものとして書かれ、実際にもどこかの貴族の邸宅の大広間のようなところで最初上演されたものであろうということは、ひとたびこの作品に接した上は、おそらく誰の心にも浮かぶ感想であるにちがいない。『夏の夜の夢』という劇は、劇中で職人たちが演ずる劇を見るシーシユースとヒポリタと同様の立場でこの劇全体を見ている一組の新婚の男女(および相伴する祝いの客たち)を想定した上で書かれていると考えるを得ないのである。この劇が最初に上演されたときには、シーシユースとヒポリタの役を当日の祝いの当人たちであった現実の新婚夫婦が演じたとする臆測にまで私は同調するつもりはないが、またそのつもりはないがゆえに、この劇の中で新婚のシーシユースとヒポリタが職人たちの演ずる祝いの劇を見るという情況が、この劇全体を現実の新婚夫婦が見るといふ形で、前者の外側でもう一度繰返されているという事態を見逃してはならないと思うのである。この劇の末尾においてオベロン、タ

(3) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

イテイニア、その他の妖精たちがしていることは、劇の中にあるシーシェースの館を祝い浄めることなのか、この劇が上演された現実の邸宅を祝い浄めることなのか、はじめのつかないものになっている。「豆の花」(Pease-blossom)、「へめ」(Cobweb)、「蛾」(Moth)、「からし」(Mustardseed)などの名で呼ばれる小さな妖精たちは、現実の婚礼において新婦に付添った子供たちがこれらに扮して演じたものであろうという説もある。事実、かれらには、それぞれ、ごく短い、そして同じ文句の繰返しと行ってよいせりふが、言いかえれば、素人の子供にも絶対にまちがえようがないほどに簡単なせりふが与えられているだけである。さきほどこの劇にはさまざまな世界が含まれていると言ったとき、実は私はこの劇が含まれていたもう一つの世界を数えなかった。それは、この劇を見物するつもりでいた人々自身の現実の世界である。シェイクスピアは、自分たちをこの劇の観客だと思っていた人々をもこの劇の中へ取り込んでしまっているのである。職人たちの芝居の見物人たちが、その芝居を含む芝居の中の人物たちであるのと同じように、この『夏の夜の夢』という芝居の見物人たちも、シェイクス

ピアによって、一つの芝居の中に取り込まれてしまったのである。シェイクスピアは、この世を芝居の舞台にたとえるのが好きである。好きというよりは、彼は、人生を比喻で捉えれば芝居になるということをしばしば示した。『夏の夜の夢』においては、彼は、いわゆる現実なるものと芝居と称されるものとの境目を消してしまっただけに見える。

『夏の夜の夢』には、シェイクスピアの多くの作品について言われるような意味での原話はない。原話を持たないということでは、この作品は直前の作品の一つ『恋の骨折損』(Love's Labour's Lost)と共通し、そのことにも一つ考察を進めたい点があるが、いまは省略する。

『夏の夜の夢』はその物語までシェイクスピアの考案であるが、この劇に投入された素材的要素については、オヴィディウス、ブルーナルコス、アブレイウスなどの古典、チョーサー、レジナルド・スコット(『魔法の暴露』*The Discoverie of Witchcraft, 1584*)、民間伝承など、種種のものが指摘される。要するに、シェイクスピアは、『夏の夜の夢』において、全体の意匠に特に入念な工夫を凝らし、彼の芸術的才能と技巧とを余すところなく発

揮して見せられるような作品を書きたいと念願し、そのために特別の努力をしたように私には思われるのである。彼にそのような特別の心遣いを要求した事情が何かそこにあつたらしく思われる。私は、以下において、そこにあつたらしく思われる事情として考えられるものをさぐって見たいと思う。

『夏の夜の夢』の初版は一六〇〇年であるが、この劇は一五九八年に出たフランシス・ミアズの『知恵の宝庫』(Francis Meres: *Palladis Tamia, Wits Treasury*)の中にすでにそれへの言及が見られる。チェーンバーズ(H. K. Chambers)はこの劇の創作年代を一五九五—六年と推定しているが、それより一年早めて一五九四—五年としている学者もいる。この点を確定することは現在ではできないが、私の推定では一五九四年がもっともそれらしくなる。

われわれの考察は、その年よりは少し遡って、一五九二年という年からはじめなければならぬ。その年はシェイクスピアにとって特別に多事な年だった。まず、その年の六月、ロンドンに徒弟たちの暴動があり、女王の

枢密院は、公安維持に必要な措置として、ロンドンのすべての劇場にその年のミカエル祭(九月二十六日)までの閉鎖を命じた。しかし、その閉鎖の期限が来ないうちに、こんどはロンドンに悪疫の流行がはじまり、劇場閉鎖はその年の末まで延長されることになった。年があけて一五九三年の一月に劇場は一旦再開されたが、すぐにまた再び悪疫の流行がはげしくなり、月末には再度劇場は閉鎖されなければならなかった。ロンドンの劇場が正常にもどったのは、結局、一五九四年の六月であつた。

一五九二年六月から九四年六月まで、まる二年間、ロンドンの劇場は事実上完全に閉鎖されていたことになる。このことは、当然、シェイクスピアを含めて、劇場で働いていた人々に大きな打撃を与えた。この間に、ロンドンの劇団は解散したり、地方へ巡業の旅に出たりした。劇作家も仕事を失うことになった。このころ、リリー(John Lyly)、『グリーン』(Robert Greene)、『キッド』(Thomas Kyd)、『ピール』(George Peele)、『ロッジ』(Thomas Lodge)、『ローウ』(Christopher Marlowe)などがいずれも劇壇を去り、あるいは死んでいるが、すべてが偶然そうだったとは言えないものがある。

(5) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

シェイクスピアも、劇場人としての道を歩みはじめた矢先に遭遇したこの苦境を何とかして切り抜けなければならなかった。劇場が閉鎖されていた間も、シェイクスピアは、地方巡業の役者の一団に加わってロンドンから出るということはしなかったようである。

シェイクスピアが、いつ、どこで、どのようにして三代目サウサンプトン伯ヘンリー・ロッツリー(Henry Wriothesley, 3rd Earl of Southampton)に近づく機縁を得たかは不明というほかはないが、右の苦境に遭遇したシェイクスピアが、このときサウサンプトン伯にすがろうとしたことは疑えないことのように思われる。シェイクスピアは、おそらく、劇場の閉鎖が一旦解かれたのちに再びそれが閉鎖の止むなきにいたり、再開の見込みもつきがなくなった一五九三年の二月に『ヴィーナスとアドーニス』(Venus and Adonis)を書きはじめ、間もなく完成し、それをサウサンプトン伯に献じた。この詩はその年の四月十八日に出版登録がなされ、ほとんど出版された。出版人はリチャード・フィールド(Richard Field)であった。この詩にはサウサンプトン伯にあてた次のような献辞がついている。

閣下、

蕪雑なる詩を閣下に献呈いたしますことの無礼のいかばかりならんか、また、かくも微弱なる荷を支えるためにかくも強力な支えを求めましたことに対して世人がいかにも申すかは存じません。ただ、もし閣下におかれましてお気に召したかに拝せられるならば、無上のお褒めをいただいたものと存じ、余暇をあげてこの道にいそしみ、行く行くはいっそうの力作を御高覧に供したき所存とお誓い申し上げるばかりでございます。しかし、もし小生の創作の初児が片輪者ということになりましたならば、かくも高貴な名親を得ましたことを申訳なく存じ、再び同じ凶作を繰返すことを恐れて、今後は一切かかる不毛の地を耕すことはいたさぬつもりでございます。ひとえに御高覧のほどを願ひ奉り、閣下の御榮譽は御意のままに従い、常に御心と天下の希望に応えるものであらんことをこいねがうものであります。恐惶謹言

閣下の忠僕

ウィリアム・シェイクスピア⁽²⁾

劇作の筆を転じて古典に取材する一編の物語詩を書き、この一作によってサウサンプトン伯に気に入られ、その眷顧を得たいと願うシェイクスピアの不安な気持がこの献辞の中にはあらわれている。『ヴィーナスとアドーニス』は、シェイクスピアが愛読したオヴィディウスの『変容物語』(Metamorphoses)に材を取り、まだ恋に目覚めぬ青年アドーニスを誘惑しようとする成熟した女(ヴィーナス)の濃厚で執拗な口説きを展開している。サウサンプトン伯が好色文学に特に趣味を持っていたことは当時も知られていたことであつた。シェイクスピアは、伯のその趣味も十分に考慮に入れてこの詩を書いたように見える。この詩は、出版に先立ち、とくにカンタベリー大司教から出版許可を得るということをしている。ここでわれわれは目を転じて、シェイクスピアが右のような事情のもとに彼の最初の物語詩『ヴィーナスとアドーニス』を献じたサウサンプトン伯について、当面必要と思われる範囲内でもう少し知識を得なければならぬ。

三代目サウサンプトン伯ヘンリー・ロッツリーは、二

代目サウサンプトン伯ヘンリー・ロッツリー(父子同名)と、モンタギュー(Montagu)子爵家から彼に嫁したメアリとの間に長男として生まれた。誕生の日は一五七三年十月六日であつた。シェイクスピアよりは九歳半年下であつたことになる。父母の夫婦仲はわるかつた。母は一五七七年ごろからほかに男(当時の文献で「平民」^{a common man}とやや軽蔑的に呼ばれている男で、名はダンセイム Donesame と書いた)をこしらへ、一五八〇年にはその男と不義を犯したことがほぼ明瞭となつて、父は母と別居したばかりでなく、母の実家モンタギュー家とも義絶した。われわれのサウサンプトン伯が、六、七歳のときのことである。彼が青年になつても結婚に関心を示さず、むしろ結婚嫌いの傾向を見せたことの主要な原因は、彼が幼少のころ見た両親の不和にあつたという説も行われている。

彼があと二日で八歳に達するといふ一五八一年の十月四日に父親が死に、彼は父のあとを襲つて三代目サウサンプトン伯になつた。しかし彼はまだ未成年であつたから、後見人を立てることが必要であつた。彼の後見人になつたのは、他ならぬ、時の権力者バーリー卿ウィリア

(7) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

ム・セシル (William Cecil, Lord Burghley) であった。かくして、若きサウサンプトン伯は、ロンドンのレストランにあったバーリー卿の邸宅セシル・ハウス (Cecil House) に起居する身となった。同じく同じくバーリー卿の後見を受けていた若い貴族の中には、二代目エセックス伯ロバート・デヴェリュー (Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1566—1601) がおり、五代目ラットランド伯ロジャ・マナーズ (Roger Manners, 5th Earl of Rutland, d. 1612) もいた。エセックスはサウサンプトンの終生の親友となり、サウサンプトンは結局エセックスの従妹エリザベス・ヴァーノン (Elizabeth Vernon) と結婚することになる。ラットランドはエセックスのまま娘 (stepdaughter) と結婚する。(シェイクスピア他人説の中には、シェイクスピアの作品とされるもののほんとうの作者はこのラットランドだとする説も含まれているが、これはわれわれとは無縁のことに属する。) 次代のバーリー卿となるロバート・セシル (Robert Cecil) もかれらと同輩の当家の息子として同じ家に住んでいた。ここに貴族の一つのグループがあった。サウサンプトン伯は、一五八五年十月、十三歳になっ

たところで、ケインブリッジの聖ヨハネ学寮 (St. John's College, バーリー卿ととくに関係の深かった学寮) に入り、一五八九年に修士 (M.A.) となってそこを去り、ついで法学院グレイズ・イン (Gray's Inn) に籍を置いた。法学院の学生たちというのは、当時のロンドンの劇場の常連の客と言ってよいものだった。したがって、サウサンプトンの方にはシェイクスピアを知るきっかけがここにもあったかも知れない。

サウサンプトンが大学を出たころ、すなわち一五八九年ごろから、彼の後见人バーリー卿は、彼の孫娘 (もっと詳しく言うと、彼の娘アンとオックスフォード伯との間に生まれた娘) エリザベス・ヴィア (Elizabeth Vere) をサウサンプトンにめあわせる努力をはじめていた。そのころ、エリザベス・ヴィアは十九歳、サウサンプトンは十六歳であった。しかし、当のサウサンプトンは結婚話に気乗りがしなかった。エリザベス・ヴィアという女性を嫌ったというよりも、結婚ということに興味を示さなかったように見える。本人はこの縁談に冷淡であったが、逆にこの縁談に大乗り気になったのは、本人の母親メアリとその父 (サウサンプトンの母方の祖父) モ

ンタギュー子爵で、極力本人に説いてこの縁談を成立させるつもりだとバリー卿に答えているモンタギュー子爵の手紙(一五九一年ごろのもの)が残っている。この事情と、シェイクスピアの『ソネット集』の最初に並んでいる数編が結婚に意志のない若い貴公子に結婚をすすめる内容のものであることとの間には何の関係もないであろうか。あると断定することもできないと同様に、ないとも断定できない。

サウサンプトン伯とエリザベス・ヴィアとを結婚させる話が周囲で進められていた一五九一年に、ジョン・クラップム (John Clapham) という人が『ナーシサス』(Narcissus) という詩を書いてサウサンプトンに献じている。ナーシシズムの元祖ナーシサスとサウサンプトンとを重ね合わせている詩であった。作者のジョン・クラップムは、バリー卿の秘書の一人であった。この詩に文学的意図とは別の魂胆があったことは推測にかたくない。この詩では、ナーシサスは自分自身に恋着してヴィーナスの求愛を受けつけない青年とされた。シェイクスピアは『ヴィーナスとアドーニス』で、アドーニスをまだ恋に目ざめない青年とした。このことは、ナーシシズ

ムを責められた青年に対しては一種の弁護の提供ともなり得たものである。

『ヴィーナスとアドーニス』の出版登録がなされてからほぼ一年後の一五九四年五月九日に、シェイクスピアのもう一つの物語詩『ルークリース凌辱』(The Rape of Lucrece) の出版登録がなされ、間もなく出版された。

『ジョン・ハリスンのために、リチャード・フィールド印刷』(Printed by Richard Field, for John Harrison) と扉頁に記されている。リチャード・フィールドは、『ヴィーナスとアドーニス』の印刷出版人であった人である。彼はストラットフォード・オン・エイヴォン出身の人で、シェイクスピアとは同郷のよしみがあった。

『ルークリース凌辱』にも、サウサンプトンにあてたシェイクスピアの献辞がついている。この献辞は、エリザベス朝に数多い同種の献辞の中でも比類がないほど献呈者と献呈を受ける人との間の親密な感情をあらわしていると言われるものである。

私が閣下に献げる愛慕の情にはきわまるところがありません。はじまりもないこの小編は、その愛慕の

情の溢れ出た一部にすぎません。閣下の御性情を存じ上げておられますればこそ、御嘉納いただける確信が持てるのでありまして、未熟な拙作にその価値があるからではございません。私がこれまでにものしましたものは閣下のものでございます。将来ものすべきものも閣下のものでございます。私の持つております一切のものに与っておられますゆえ、私のものはことごとく閣下のものでございます。私の価値がもっと大きければ、尽し奉る心ももっと大きくあらわれるはずでございます。さはあれ、只今のままにても、忠勤はひたすらにこれを閣下に献げ、閣下の御長寿を祈り、御清福のいよいよ加わらんことをこいねがうものであります。恐惶謹言

閣下の忠僕

ウィリアム・シェイクスピア⁽⁴⁾

これと、さきの『ヴィーナスとアドーニス』につけられた献辞とを比較して読むと、あれから一年の間に、シェイクスピアとサウサンプトンとの間の交誼は急速に深まったという感じを抱かざるを得ない。ここで再びシェイ

クスピアの『ソネット集』がわれわれの注目を要求するものとなるが、いまそちらへ赴くと、話は簡単なことではすまされなくなり、なかなか本題に帰れなくなるので、いまそのことは差し控えざるを得ない。

『ルークリース凌辱』の出版登録がなされたのと同じ一五九四年の五月に、サウサンプトンの母メアリが、サー・トマス・ヘネッジ (Sir Thomas Henage) と再婚した。サー・トマスは、当時、エリザベス女王の次席宮内卿 (Vice-Chamberlain) の役職にあった人である。そして同じ年の十月、サウサンプトンは、ハンプシャのテイチフィールド (Titchfield, Hampshire) の彼の本邸において成年を迎えた。それを祝う何かの行事があったとしても、それを伝えている記録はない。

一五九五年、若いサウサンプトン伯はエリザベス女王の宮廷で花形の一人になっていた。彼の親友で女王の第一の寵臣エセックス伯は、女王の寵愛に狎れてわがままな振舞いが多くなり、女王との間に感情のみぞを作りはじめていた。女王の寵愛がエセックスを離れたときには、それはサウサンプトンへ移るのではないかという観測も無理のないものに見えた。しかし、女王はついにサウサ

ンプトンをエセックスの代わりにするといふことはしなかつた。その大きな理由は、サウサンプトンが女王の侍女の一人エリザベス・ヴァーン(エセックスの伯母の娘といふので、エセックスの従妹)と親しくしたことにあつた。女王は自分の廷臣が他の女を自分以上に愛することを嫌い、そうすることをほとんど大逆(High treason)の罪に等しいものと考えた。エリザベス・ヴァーンは、シュロップシャー(Shropshire)の郷士サー・ジョン・ヴァーノンの娘で、一五七三年一月十一日の生まれであつたから、サウサンプトンとはほぼ同年齢、詳しく言えば約九か月年上であつた。彼女は、サウサンプトンとの關係を生ずるより少し前に父を失っており、その後はエセックスが彼女に年五〇ポンドを与えて、その面倒を見ていた。サウサンプトンとエリザベス・ヴァーンとは親しい關係をつづけていたが、二人が正式に結婚したのは、エリザベスが身ごもつたのちの一五九八年八月のころで、同じ年の十一月に女兒が誕生した。名はペネロピー(Penelope)とつけられた。直接には、エセックスの姉で、リッチ卿夫人となつてゐたペネロピー(Lady Penelope Rich. サー・フィリップ・シドニーが恋した女性)

にちなんであつた名前である。

話を一五九二年にもどす。その年の六月から劇場が閉鎖されたことは前に述べたとおりである。その年の九月、ロバート・グリーンが、ロンドンの場末の居酒屋でどう酒を飲みすぎ、酔潰けにしんを食いすぎたあと、靴屋の一室で死んだ(彼の敵ゲイブリエル・ハーヴィ Gabriel Harvey が伝えるところによる)。そして、間もなく、いわば遺著のような形で、彼の『後悔万両知恵一文』(A Groatworth of Wit Bought with a Million of Repentance)が出た。この自伝的雑文集は、劇作家としてのシェイクスピアへの最初の言及を含んでいる文献と見られ、そのことでとくに有名である。文献の上で劇作家シェイクスピアを迎えた最初の声は、先輩の悪意に満ちた攻撃とも怨嗟の声とも見られるものである。

グリーンは、劇作家一般が受ける報酬の割の悪さをおこち、同僚の劇作家たちに早く足を洗ってまっとうな仕事につけとすめたと、とくに今は、「われわれの羽根で飾り立てた成り上り者の鳥がいて」("there is an upstart Crow, beautifed with our feathers") として「虎の心を役者の皮で包んだやつで」("that with

(11) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

his *Tiger's heart wrapt in a Plover's hide*”——斜体の部分は、シェイクスピアの初期の作品とされる『ヘンリー六世』第三部、第一幕第一場二三七行目 “Oh, tiger's heart wrapt in a woman's hide!” “おお、虎の心を女の皮で包んだやつめ”のまじり、そして「諸君の誰にも負けずに無韻詩をおとると思ってる」 (“supposes he is as well able to bombast out a blank verse as the best of you”)。そしてまたこの「何でも屋」 (“*Johannes fac totum*”) で、われこそは天下唯一人の “Shake-scene” だとおぼろげれていると、グリーンはそう書いた。“Shake-scene” というのは、劇場を揺さぶるほどの拍手喝采を得ている人気作家というほどの意味であろう。グリーンの造語である。それが Shakespeare の名にかけた造語にちがいないということは誰にでもわかることである。他人のものを借りて、あるいは盗んで、自分の羽振りをよくしていると言われたことは、当然のことだが、シェイクスピアにはとくに類にさわったらしい。八年後に『ハムレット』を書いたときにも、シェイクスピアはこのときのことを忘れていなかったように思われる。ハムレットがオフィーリアに与えた手紙の中に

“the most beautified Ophelia” という言葉を認めたが、ローニスは “That's an ill phrase, a vile phrase; ‘beautified’ is a vile phrase.” —— “beautified” とするのはわるい言葉だ、意地のわるい言葉だ、と言っている。ロバート・グリーンが『後悔万両知恵一文』という著作は、従ってそこにあるシェイクスピア非難の文字は、実はグリーンの筆ではなくて彼の親友トマス・ナッシュ (Thomas Nashe) の筆に成るものだという噂が、どうい風にかして (すでに死んだ男は相手にできないからか)、それが世に出るとすぐに世間に立っただらう。ナッシュは同年の十月半ばに、彼の『一文なしのピアス』 (*Pierre Penniless*) の序文で、強くその風評を否定し、グリーンの件の書の半言隻句といえども自分の筆ではなく、またその印刷出版にも自分は一切かかわりはないという弁明をしている。ナッシュも、一五九四年には、彼の『不幸な旅人、ジャック・ウィルトンの生涯』 (*The Unfortunate Traveller, or the Life of Jack Wilton*) をサウサンプトンに献することになる。もし、サウサンプトンとシェイクスピアとの間がすでに親密になって来ており、一方ナッシュにもまたサウサンプトンの眷顧を得

たいという願望がそのころあったとすれば、シェイクスピアを誹謗したという疑いが不当にわが身にふりかかり、そのことから自分に対するサウサンプトンの心証がわるくなるというがごとき事態は、ナッシュとしては是非とも防がなければならぬことであつたにちがいない。

グリーンの問題の書を編集し、その出版の面倒を見たのはヘンリー・チェトル(Henry Chettle)であつた。彼もまた、一五九二年十二月、『人情家の夢』(*Kind-Heart's Dream*)という自著の序文で、グリーンへの攻撃を印刷公表したことは編集者としてまことに思慮に欠けるところがあつたと反省の言葉を述べ、とくに、チェトル自身は「彼が(シェイクスピアが、と読める)職とするところに秀でる(すぐれた劇場人である)と同様に、立居振舞も上品な人であることを見て知っているのだから」("because my selfe haue seene his demeanor no lesse civill than he exelent in the qualitie he professes")と言つた。そして、「その上、身分の高い何人かの方々が、彼は曲つたことをしない人である、すなわち正直な人であると申しておられ、書いたものには諧謔的魅力がある、すなわち彼の腕は確かであると申しておら

れる」("Besides, diners of worship haue reported his uprightnes of dealing, which argues his honesty, and his facetious grace in writing, that approves his Art.")とも述べて、チェトルもまたしきりに弁解につとめている。チェトルによつて世に広められたグリーンへのシェイクスピア攻撃の文字を見て、シェイクスピアの弁護に乗り出し、彼を救出することに力を貸した「身分の高い何人かの方々」の筆頭にサウサンプトン伯がいなかつたであらうか。

ニコラス・ロウ(Nicholas Rowe)の編んだシェイクスピア全集(一七〇九—一〇)には、シェイクスピアの伝記の最初のものとも言うべき、*Some Account of the Life of Shakespeare*、という文章がはじめについているが、その中で、ロウは、もしサー・ウィリアム・ダヴィナント(Sir William Davenant)が確かな話だと言つてゐるといふことがなければここに挿入はしないのだがと断つて、サウサンプトンがあるときシェイクスピアに、〇〇ポンドを与え、シェイクスピアが買いたいと思つてゐたものを買わせたと話をしてゐる。ダヴィナントというのは、文学史の上では主としてイギ

(13) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

リス最初のオペラ『ローツ島包囲』(The Siege of Rhodes, 1656)の作者として知られているが、オックスフォードの「王冠亭」(The Crown Tavern)という、シェイクスピアがロンドンと郷里ストラットフォードとの間を往復する間にしばしば立ち寄ったとしてもふしぎはない居酒屋の息子として生まれた人で、みずから、自分の実の父はシェイクスピアだということを言っていた人である。(シェイクスピアの『ソネット集』の、いわゆる「黒い婦人」the Dark Lady は右の「王冠亭」の女将のことではないかという説も行われている。)ロウが、「シェイクスピアのことを多分非常によく知っていたダヴィナント」と言っている裏には、そういう事情もひそんでいる。エリザベス朝で一、〇〇〇ポンドと言えば、莫大な金額である。シェイクスピアが一五九七年に故郷の町に、その町で二番目に大きかった邸宅「新屋敷」(New Place)を買ったときに彼が支払った代金は六〇ポンドであった。一、〇〇〇ポンドと言えば、そういう大邸宅が十六、七買えた金額である。ドーヴァ・ウィルソン(John Dover Wilson)はこの言い伝えは、一五九四年に宮内卿劇団(Lord Chamberlain's Men)が新

たな発足をしたとき、その劇団の設立資金のうちのシェイクスピアの出資分をサウサンプトンが出してくれたことを意味するのではないかと推測している(The Essential Shakespeare, pp. 66—67)。そのためには一〇〇ポンドでも多すぎたであろうとも言われるが、とにかく、シェイクスピアが以後約二十年間、生涯の終り近くまでわが身を託した宮内卿劇団(一六〇三年ジェイムズ一世の即位とともに国王劇団 the King's Menとなる)に対して、彼がその大株主の一人でもあったことは確実なことである。

一五九四年六月、悪疫の流行もやっと収まり、ロンドンの諸劇場は再開された。劇場再開の皮切りに、かつてのストレインジ卿(ダービー伯)お抱えの一座と海軍卿お抱えの一座とが、エドワード・アリン(Edward Allyn)を中心に、とにかく集められるだけの両劇団の役者を集めて、ヘンズロウ(Philip Henslowe)の劇場ニューイングトン・バッツ(Newington Butts)で合同公演をし、いくつかの芝居を上演したことがヘンズロウの日誌によって知られる。しかし、この合同公演は臨時的名もので、十日間で終り、役者たちはすぐに新規に二つ

の劇団に分かれ、エドワード・アトンを中心に新しい海軍卿劇団 (Lord Admirals Men) がテムズ南岸のローズ座 (the Rose Theatre) に拠って旗上げし、ケンプ (William Kempe)、『ヘミングス (John Heminges)』、『フィリップス (Augustine Phillips)』など旧ストレーンジ卿劇団の面々に、『リチャード・バーベッジ (Richard Burbage)』とウィリアム・シェイクスピアという有力なメンバーを加えて、新しい宮内卿劇団が組織され、これはロンドンを北に出はざれたところに建っていた「劇場」(the Theatre. 前記リチャード・バーベッジの父ジエイムズ・バツページが一五七六年に創設したイギリス最初の公衆劇場で、創設当時は同類のものが他になかったから、ただ「劇場」と呼べばよかったのである) に拠った。劇場が再開されるとともに、シェイクスピアはサウサンプトン伯の身边を離れて、再び公衆劇場へもどって行かなければならなかった。

一五九四年と言えば、シェイクスピアは三十歳であった。彼はそのころ、一時、とくにサウサンプトンと親密な関係ができ、貴族社会の空気を多く吸ったころ、公衆劇場の役者あるいは座付作者という彼の職業に不満を感

じたと考えられる節がある。彼のソネットの第二十九番、百十番、百十一番などにそういう彼の気持がかなり明白に出ているように思われる。第二十九番には、「私がいちばんのしいとしていることに少しも満足をおぼえない」(With what I most enjoy contented least.) というような言葉も見える。(いま、それらのソネットを引いている暇のないことを残念に思うが、興味のある方はそれらを参照していただきたい。) サウサンプトンと親密になることによって、若い貴族たちのサークルになじんだシェイクスピアは、できれば、いつまでもサウサンプトンの身边に留まり、サウサンプトンや彼の友人たちが作り出している世界で文学的名声を得たいという願望を持ったかも知れない。エリザベス朝の社会では、かりにシェイクスピアがそういう願望を抱いたとしても、理解できないことではない。もし、サウサンプトンが、新発足の宮内卿劇団に、シェイクスピアの名で多額の出資をしてくれたとすれば、サウサンプトンにもシェイクスピアのそういう気持が通じていたからのことであったとも考えられる。それは、一種の手切れ金であったかも知れない。

(15) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

そこで、いよいよ、『夏の夜の夢』であるが、この芝居は、誰か貴人の婚礼の祝いの劇として書かれ、元来は私的に上演されたものと考えられることは最初に述べた。ドーヴァ・ウィルソンは、彼の『シェイクスピアの幸福な喜劇』(Shakespeare's Happy Comedies, 1962)の中で、この劇が誰かの婚礼の祝い、の劇として書かれたとした場合、それは誰の婚礼であったかという問題を考える上で考慮の対象となるべき結婚を七つ挙げている(二〇一ページ)。実は、その七つのうちのはじめの六つはE・K・チェインバーズがこのことに関して指摘したものの踏襲であり、最後の一つは、ウィルソンがシドニー・リー(Sidney Lee)の『シェイクスピア伝』(A Life of William Shakespeare, p. 232)から拾って追加したものである。事の詳細はチェインバーズあるいはウィルソンにゆずって、いまは結論的なことのみを言えば、ウィルソンの挙げている七つの結婚のうち、『夏の夜の夢』にもっとも密接に結びつくと思われるのは、二番目のものと三番目のものである。

ウィルソンが挙げている二番目のものというのは、すでに本稿でも触れたもので、それは、サウサンプトン伯

の母、すなわち二代目サウサンプトン伯爵夫人と次席宮内卿サー・トマス・ヘネッジとの結婚である。われわれのサウサンプトン伯にとっては、母の再婚である。この婚礼が行われた場所は不明であるが、日時は一五九四年の五月二日であったことがわかっている。当日の新婦は、いろいろ問題のあった女性とは言え、とにかくサウサンプトンの実の母であった。新郎は、次席宮内卿の地位にあった。シェイクスピアが他の人々とともに新規の設立に加わろうとしていた劇団は、宮内卿の名を戴こうとする劇団であった。もし、この二人の結婚に際してシェイクスピアが祝いの劇を書くことを依頼され、しかも、その依頼がサウサンプトン伯の口からなされたとしたら、シェイクスピアはどのような気持をもって、あるいはどのような念願をこめて、その仕事に当たったであろうか。この婚礼が行われたのは五月二日である。『夏の夜の夢』が五月祭の日、すなわち五月一日を含んでいるのは果して偶然であろうか。

この劇との関係でとくに注目されるもう一つの婚礼は、一五九五年一月二十六日に行われた、六代目ダービー伯ウィリアム・スタンリー(William Stanley, 6th Earl

of Derby) とエリザベス・ヴィアとの間のそれである。このときの新郎は五代目ダービー伯ファーディナンド・スタンリー (Ferdinando Stanley)、通称ストレンジ卿の息子であった。シェイクスピアは、サウサンプトンと親しくなる前、すなわち彼の駈け出しのころ、ストレンジ卿お抱えの劇団に所屬していたのではないかという推測もある。当日の新婦は、繰り返すまでもなく、バーリー卿の孫娘であり、サウサンプトンの花嫁候補に挙げられた女性、そして、サウサンプトンが周囲の圧力に屈していたならば、当然彼の妻になっていたであろうと考えられる女性である。この結婚式はグリニッジ (Greenwich) で挙行されたのでなかったならば、ロンドンではストランドにあったバーリー卿の邸宅セシル・ハウスで行われたのであったにちがいない。サウサンプトンは、父を失ったあと、少年のころの数年を、バーリー卿に後見されつつ、その邸宅に起居したことは前に述べたとおりである。この婚礼の祝いの劇を書いてくれという注文が、サウサンプトンを介してシェイクスピアにもたらされたとしても、これもまた、少しもふしぎではないことのように思われる。

私は、右の二つの婚礼のうちのどちらがいつそう強く『夏の夜の夢』に結びつきうるかをここで判定することはできない。そして、今の場合、その判定はつかなくともかまわない。私にとって重要に思われることは、『夏の夜の夢』との関係において右の二つの婚礼のいずれを採っても、そこにサウサンプトン伯がきわめて自然に介在することができ、おそらくは介在したであろうという推測である。

一五九二年の六月にはじまった劇場閉鎖が意外に長引くことになり、精神的にも物質的にも苦境に陥ったであろうシェイクスピアを温く受け入れてくれたのはサウサンプトン伯であった。グリーンンの悪意に歪んだ攻撃から彼をかばってくれた最有力者も彼であったであろう。シェイクスピアが公衆劇場の世界で末永く安心して働けるように、彼のために多額の資金を出してくれた人がいたとすれば、それは彼以外には考えられない。いや、何よりも、シェイクスピアとサウサンプトンとの間には、シェイクスピアの『ソネット集』に歌われているような複雑で深い感情の交わりがあったと見ることは多くの人に よって支持されていることであり、中には、精神的な意

(17) 『夏の夜の夢』のシェイクスピア

味においてではあるが、二人の関係をあからさまに「ホモセクシュアル」と呼んでいる人さえいる。

二人の間に大略右に窺い知りえたような事情があったのちに、一五九四年(その年の六月に劇場は再開された)のいつのころにか、サウサンプトン伯からシェイクスピアに対して、伯とは深い縁でつながるある貴族の婚禮の日の祝いのものとして、当日の新郎新婦をはじめ貴紳淑女の集うところで上演するための芝居の脚本を書いてくれという注文がなされ、それに応えて彼が筆を執って書いたのが『夏の夜の夢』という作品であったとすれば、シェイクスピアがその作品の執筆に特別の抱負と念願とをもって当り、その全体の形態的構造においても特別に凝った趣向を用い、特別に複雑な意匠を考えたとしても、すなわち、それがわれわれの知るがごとき『夏の夜の夢』になったとしても、それはよくわかることのように思われるのである。

〔付記〕 この拙稿は、第七回シェイクスピア学会(昭和四十四年十月十二、十三の両日、秋田大学で開催)において口頭で発表したものに若干の増補と改訂とを施したものである。

(1) たつた The Reader's Encyclopedia of Shakespeare (1966) の編者 Oscar James Campbell.

(2) 'Wriothesley' は通称「ロマンリー」と発音され、来たが、正確な発音は不明である。 Cf. G. P. V. Akridge: *Shakespeare and the Earl of Southampton* (Hamish Hamilton, 1968), p. 3.

(3) 左に原文を示す。

Right Honourable,

I know not how I shall offend in dedicating my unpolished lines to your lordship, nor how the world will censure me for choosing so strong a prop to support so weak a burden: only, if your honour seem but pleased, I account myself highly praised, and vow to take advantage of all idle hours, till I have honoured you with some graver labour. But if the first heir of my invention prove deformed, I shall be sorry it had so noble a godfather, and never after ear so barren a land, for fear it yield me still so bad a harvest. I leave it to your honourable survey, and your honour to your heart's content; which I wish may always answer your own wish and the world's hopeful expectation.

Your honour's in all duty,

WILLIAM SHAKESPEARE

(4) 左に原文を示す。

The love I dedicate to your lordship is without
end; whereof this pamphlet, without beginning, is
but a superfluous moiety. The warrant I have of
your honourable disposition, not the worth of my
untutored lines, makes it assured of acceptance. What
I have done is yours; what I have to do is yours;

being part in all I have, devoted yours. Were my
worth greater, my duty would show greater; mean-
time, as it is, it is bound to your lordship, to whom
I wish long life, still lengthened with happiness.

Your lordship's in all duty,

WILLIAM SHAKESPEARE

(一橋大学教授)